

上手と達者と花

楽劇における歌と演技と台詞

2023/09/16



いま、NHKの土曜講座では「ワーグナー劇場」と称して、ワーグナーの楽劇をズイ〜と並べて観ています。先日の講座の《指環》の《ジークフリート》では、ミーメを歌う歌手を、「歌も良いが、演技も拔群だ」として褒め称えました。大谷翔平選手のように二刀流です。むろん、ワーグナーの楽劇は、その名の通り、「音楽とお芝居」ですから、歌も、演技も、両方とも必要です。でも実際のオペラの舞台には、歌を優先して演技は二の次の歌手が多いのです。オペラでは、突っ立ったままで、なんの振り付けも、顔の表情も変えないで、ただ歌うだけの「名歌手」が多いのです。私はこれが、不満でした。オペラには、演技も必要です。舞台芸術ですから当然です。それで、テノールのグレアム・クラークを見て驚きました。歌はもちろん、ミーメらしい、いやらしい声を張り上げて歌い、台詞(歌詞)も流暢(りゅうちょう)で、動作も矮人(こびと)らしく姑息な格好で振る舞います。ジークフリートの第1幕と第2幕は、まさに、「ミーメの場」です。上手いものです。

「上手」(じょうず)とは

ところが、この「上手い」という褒め方は、本当に誉めたことにはならないようです。能の完成者世阿弥にいわせれば、「謡(うた)と動作が上手いだけでは上手とは言えない」というのです。

音曲・舞・働き足りぬれば、上手(じょうず)と申すなり。達者になれば不足な

ること是非なけれども、それにはよらず、上手はまた別にあるものなり。その故は、声よく舞・働き足りぬれども、名人にあらぬ為手（して）あり、声悪く二曲さのみの達者になけれども、上手の覚え天下にあるもあり。これすなはち舞・働きは態（わざ）なり、主になるものは心なり。さるほどに面白き味はひを知りて心にてするは、さのみの達者になけれども、上手の名を取るなり。しかれば真（まこと）の上手の名を得ること、舞・働きの達者にはよるべからず。この分け目を知ること、上手なり。
【小西甚一編訳 世阿弥『花鏡』266頁】

訳 謡と舞踊的方面がよくできれば、ふつう上手というのである。（しかし上手は）同時に達者でもあるとは限らないから、二曲が技術的に完成されていなくとも、やむをえないが、技術の如何にはよらず、上手というものは（達者とは）また別に存在するのである。そのわけは、声がよく舞踊的方面も十分なのに、名人（上手）でない役者がいるし、声がわるく二曲がそれほどすぐれた達者でもないのに、天下に上手という名声が高い人もいる。これは、つまり、舞踊的方面は「態」（わざ）だし、それを支配してゆくのは「心」である。だから、おもしろく感ずるということがどうして生まれるかの「理」を知り「心」で演じてゆく役者は、それほどの達者ではなくても、上手として世に認められるのである。だから、ほんとうの上手だと世に認められるのは、舞踊的方面において達者であるかどうかによるわけでないだろう。この区別を理解しているのが、上手なのである。

上手は達者ではない

これは、小西甚一先生の『古文の読解』にある課題の文章なのですが、小西先生はこの文を次のように解釈しておいでです。

上手・達者・名人がそれぞれ芸のうえでどんな関係にあるかを論じたものだが、これらの意味内容は、現代語と同じではない。まず「上手はまた別にあるものなり」によって、達者と上手が一致しないことは明らかである。どこが違うかといえば「態」と「心」にある。「舞・働きは態なり」とあるが、音曲（謡）も態に含めてよく、二曲がそれに当たる。二曲というのは謡と舞との両者をさす世阿弥の用語である。世阿弥によると、能の基本は謡（うた）と舞（まい）であって、まだ年少の時は謡と舞だけを稽古させ、劇的な動作や心の持ちかたなどは、成人してから教えるのがよいといわれる。つまり、二曲を自由にこなす技術が「態」（わざ）であり、その点で完成の段階に至ったのが達者である。はじめに「音曲・舞・働き足りぬれば上手と申すなり」とあるので、いかにもそれが上手の定義であるかのような感じをあたえるけれど、そうではない。あとに「声悪く二曲さのみの達者になけれども上手の覚え天下にあるもあり」「真の上手の名を得ること、舞・働きの達者にはよるべからず」とあるとおり、上手はかならずしも二曲の技術が完成されているとは限らないのであって、むしろ能の「理」に通じている「心」のはたらきこそ、上手であるための必要条件なのである。もっとも、これは世阿弥の意見であり、世間でふつう上手と言われるのは、二曲の技術にすぐれた役者のことで、上手と達者が混同されている。それを「心」と「態」の観点から区分したのが、この文の趣旨である。
【小西甚一『古文の読解』176頁】

なるほど。世阿弥は、能の基本である歌と舞が巧みでも、「これは上手であって、達者とは言えない」というのです。歌と舞が巧みなのは「態」（わざ:技術）であって、能の真髄に達するための「心」がなければ「達者」ではない — というのです。なんだか、よくわかりません。世阿弥のいう「心」とは、彼の造語の「花」のことなのでしょうが、「態」（わざ）と言う字は、「能」（のう）の字の下に「心」が付いたものです。世阿弥は、洒落をいっているのでしょうか？

「花」とは面白さと新鮮さ

また、別の箇所、世阿弥は、「花」について次のようにいっています。小西先生の訳でご紹介します。

いったい、花というものは、あらゆる草木において、四季の時節に咲くので、ちょうど咲くべき時に咲くのを新鮮に感ずるため、人びとが賞翫するのである。申楽(さるがく)においても、観客が新鮮に感ずる点がすなわち、おもしろさなのである。したがって、「花」とおもしろさと新鮮さと、この三者は、同じ意味あいなのだ。どんな花でも、いつまでも散らないで残るものは無い。散るゆえにこそ、咲く時節になって咲くのが新鮮なのだ。能も、固定しないのが「花」だと、まず心得るがよい。ひとつの「風」(ふう:流儀)ばかり演じないで、他の芸態に移るようにすれば、新鮮さが生ずるわけである。【小西甚一編訳 世阿弥『花伝書七別紙口伝』146頁】

わざあり！

もう一度、グレアム・クラークのミーメの歌と動きを観てみましょう。ここでは、乱暴者のジークフリートを相手にしながら逃げ惑い、でも、彼に恩を売ろうと必死です。楽劇の「理＝花」である、歌い、動き、しゃべり、走り、姑息さと諛(へつらい)と保身と、どうしても指環を手に入れたい下心を、舞台の上で、全身で現して、一時(いつとき)も身体も表情も止めません。見せます。観客を飽きさせません。面白くて、新鮮です。「態(わざ)あり！」です。見事です。やはり、上手で、達者です。この彼の演技のうち、ほとんどは演出家の指示で動いているのですが、それを可能にする演技力と歌唱力は彼独自のものです。素晴らしいです。脇役的なミーメのキャラクターは、俺が俺がの力の強いワーグナーの楽劇の役柄の中でも秀逸です。それで、そのためにもグレアムのような、弱くても強い、万能な役柄の歌手が必要なのです。

また、後手を踏むミーメ

また、それで、第2幕でのミーメと兄貴のアルベリヒとの駆け引きも見物(みもの)です。ジークフリートが竜の洞窟に入っていったのを見澄まして、ミーメは様子を見に洞窟へ入っていきこうとします。そのミーメの前にアルベリヒが現れて、突然、行く手をさえぎります。ミーメが恐れていたことが起きたのです。ヴォータンの次に、最強の相手アルベリヒの登場です。

アルベリヒ 指輪はお前のものにはならんぞ。

ミーメ えっ、その指輪は、いま、どこにある？ 臆病者のお前が、巨人族に奪われたんじゃないか！ お前が失くしてしまったものを、わしは策略で取り戻すのだ。

アルベリヒ あの若造の行為のおこぼれに、お前のようなしみったれがあずかるわけか？ でもな、指輪はお前のものにはならん。あの陽気な若造が指輪を持っている限りはな！

ミーメ あいつを育てたのは、このわしだぞ。今こそ養育料を払ってもらおうのだ。数々の苦勞と重荷が報われる日を、わしは首を長くして待っていたんだ！

アルベリヒ けちで卑怯な奴隷のお前が子どもを育てた養育料代わりに、思い上がりも甚だしく、王になろうというわけか？ 指輪がお前の手に入るぐらいなら、病気の犬にくれたほうがまだマシだ。お前みたいな無礼な奴に、支配者の指輪が手に入るものか！

ミーメ (頭を掻きながら) そうか、そこまで言うなら兄貴にやるよ、あのきらめく

指輪はな！ 王となるのはあくまで兄貴だ。だが、代わりに、わしを王の弟にしてくれ！ そして、わしの作った愉快なおもちゃ、あの隠れ兜を、指輪の代わりに、わしにくれ。二人にとっておいしい話だ。獲物を二人で山分けしよう。（ミーメは、信頼してくれと言わんばかりに、両手をもみしだく）

最初は指導権を握っていたミーメでしたが、次第にアルベリヒの剣幕に押されてタジタジとなり、ついには軍門に降ります。この一連の負け戦の「件」（くだり:文章の一節）も見せ所であり台詞の聞かせ所です。

ミーメとジークフリートに愛はない

元々、ミーメは、冷酷で、残忍な小人です。孤児のジークフリートを操って指環を竜から奪いとらせようとたくらんでいて、それで、ジークフリートを育てたのです。それで、養育費に指環を所望(しょうぼう)したのです。ミーメは、ジークフリートに愛情などこれっぽっちも感じていません。相手は「地上世界」の人間、こちらは地下のニーベルング族の倭人(こびと)です。お互いに敵対関係にあり、相手と相容れません。それに、ミーメは、すでに世界を征服する指輪に心を奪われ、「愛」を断念しているのです。ミーメに愛がないことをジークフリートも知っています。ミーメに育てられたとしても、なんの恩も感じていません。ミーメが自分を毒汁で殺そうとしていると知ったとき、なんのためらいもなくノートゥングで斬り殺してしまうのもそのためです。この二人の間には、愛はないのです。そのあたりは、ワーグナーも冷淡で、覚悟の上の愛なき「プロット」(筋書き)を書いています。もっとも、このときのミーメの首は、すでにヴォータンのものであったのですから。ミーメはだれに殺されても文句は言えません。《ジークフリート》は、殺伐(さつぱつ)としていて、殺しが二つもあります。でも、このあとの森の小鳥とブリュンヒルデの登場で救われます。この二つの生き物は、愛にあふれています。

楽劇には「俳優歌手」が必要

全体に、ミーメには、終始、いいところがありません。嫌われ者です。でも、この楽劇《ジークフリート》のなかで最も異彩を放っているのは、なんといってもミーメです。若くて強いジークフリートよりも、悪知恵も働くミーメです。全能な神々の王ヴォータンよりも、駆け引き上手なミーメです。強権な兄のアルベリヒよりも、懐柔策では優るミーメです。ワーグナーも、この必死で生き延びようとする底辺のミーメを愛しているようです。なぜ、ワーグナーは、ミーメをひいきにしたのでしょうか？ それは、オペラや楽劇の課題である、「作曲家は、だれに見せるために書いたのか？」 「なんのために、書いたのか？」の答ともなるものです。鍛冶屋のミーメは労働者です。でも、この労働者こそ、新しい時代の市民です。《ニーベルングの指環》は、労働者が市民となって市民社会・国民社会を創設する物語です。挫折したとは言え、ミーメも、新しい社会で活躍する主人公の一人なのです。それで、ミーメは、歌も、台詞も、役柄も、伴奏音楽も、他の登場人物のものよりも繊細で、変化に富み、魅力的で、丹念に良く書かれていなければなりません。観衆が、このワーグナーの意図に気づかせてくれるのは、やはり、ミーメを演じる歌手です。楽劇には、ワーグナー劇の真意を伝えてくれる、優れた「俳優歌手」が必要なのです。

台詞を聞く

さて、歌と演技のあと、歌手たちに楽劇鑑賞者として期待するのは、抑揚ある、流暢な、演劇的な台詞まわしです。それも、ドイツ語特有の台詞まわしです。私たちは、受講生の中の一部の人を除いて、ドイツ語がよく分からないので、良い翻訳を手にし

ながら、舞台をよく見て、歌手の口から文言(もんごん)の言い回しがよく聞きとれるかどうか — です。

ミーメの歌と台詞と演技の聞かせどころ見せどころは、なんとといっても《ジークフリート》の次の第2幕です。

ジークフリートにまんまと竜ファフナーを殺させたとしても、今度は、どうやって、ジークフリートから指環と隠れ兜をせしめるのか？ それには、ジークフリートを殺すに限ります。ジークフリートが一生懸命、ノートゥングを鍛えている間に、ミーメは毒草から毒汁を作ります。ジークフリートが竜をやっけてから、「さあ、疲れたろうから、元気になる薬を飲みな」といって飲ませようとするのです。それで、第2幕では、ミーメがジークフリートをだまして毒汁を飲ませるシーンがあります。心の中で思っているたくらみがすべてジークフリートには分かかってしまって、ミーメは慌てふためきます。その演技には、隠していながら現す — 「花」が必要です。ミーメには、なぜ、ジークフリートに自分の心の中のたくらみが知れたのか、さっぱり分かりません。このあたふたするミーメの歌と演技と台詞まわしが、聞かせ所、見せ所です。

ジークフリートを毒汁で殺す

ミーメは、見事に竜をやっつけて指環と隠れ兜を取りもどしたジークフリートに毒汁を飲ませて、目指す二つのものを奪い返そうとジークフリートに近づきます。ミーメはジークフリートに、「疲れたろうから、さあ、このおいしい飲み物を飲むが良い」と毒汁を差し出します。ジークフリートは、「ぼくを殺そうというのだな！」と叫びます。自分の心を見破られたミーメは、大いにうろたえます。「(独白) どうして、俺の心がわかったのだろうか？」と不思議がります。竜の血を舐めたジークフリートは、相手の心が読めるようになったのです。そのことを知らないミーメは、ジークフリートをだますことをつづけます。ここはユーモラスなシーンなのですが、ミーメ役を演じる歌手にとっては、心を読まれたこのときのミーメの狼狽振り(ろうばいぶり)と怪訝(けげん)さと取り繕い(つくろい)方とが、台詞の中で、瞬時に、現されなければなりません。心を込めて狂わなければならないので、苦心のいるところです。

ちぐはぐなやりとり

さあ、緊張して、また、楽しみにして、この二人の、一見、ちぐはぐなやりとりを聞きましょう。ワーグナーが、いかに優れた、巧妙な台本作者であるかが分かります。

ミーメ (きわめて親しげな様子で) まあ、落ち着くんだ！ もう長くはないぞ。お前がわしの姿を見るのもな。じきに永遠の眠りへとお前の眼を閉じてやるからな！ わしにとって必要だった仕事を、(猫なで声で) お前はもうすっかり成し遂げてしまった。今となっては、残る仕事は、お前から獲物を奪い取ることだけ。きっと、まんまとうまく行くはずだ。お前ごときをだますのは、いとも簡単なのだから！

ジークフリート つまり、ぼくを殺そうというわけだな？

ミーメ (いぶかしんで) わしはいま、なんと言った？ 息子よ、よく聞くんだ！ お前と、お前の種族を、わしはずうっと、心から憎んできたのだ。(猫なで声で) わしが厄介者のお前を育てたのは、愛情のゆえではない。ファフナーが守っている財宝こそ、あの黄金こそ、わしが苦心して求めてきたものなのだ。(まるで、素敵なことでも約束するかのように) だから、お前がわしに自ら黄金を差し出さないのなら、(まるでジークフリートのために今にも命を投げ出す決心があるかのように)、ジークフリート、息子よ、分かっとるだろう、(親しみを込めて親しげに)

お前はわしに命を差し出さねばならんのだ！

ジークフリート お前がぼくのことを嫌いと聞いて、ぼくの方も嬉しいよ。だが、それに加えて、命までも差し出せと言うのか？

ミーメ (怒って) そんなことを、わしが言ったか？ お前は、わしの言うことを、すぐに誤解してとる！ (ミーメは瓶を取り出してくる。誰にも分かるほどわざとらしく声音を変えながら) さあ、激しい戦いで疲れているだろう。まだ体がカッカと火照っているだろう。そんなお前の喉を、冷たい水で癒すのを、気の利くわしは、忘れていなかったぞ。お前が剣を熱くたぎらせていた時、わしはこの汁を温めていた。お前が、この汁を飲み込めば、お前の大切な剣が、わしのものになる。剣だけではない。兜と財宝もだ。(ミーメは、ククッと笑う)

ジークフリート つまりお前は、ぼくの剣が目当てなんだな？ ぼくが手に入れた指輪や財宝を、お前は奪い取るつもりなんだな？

ミーメ (激しく) どうして間違った受け止め方をするんだ！ 舌がもつれてるのかな？しゃべりすぎてしまうんだらうか？ わしは、物凄い苦勞をしてるんだぞ、内心の思いを、偽善の嘘でごまかすためにな。なのに、バカな小僧のお前と来たら、万事間違った受け止め方をする！ 耳の穴をかつぽじて、しっかり聞き取れ。ミーメの言葉を、よく聴くのだ！ (またもきわめて親しげに、見え透いたわざとらしさで) さあ、この飲み物を手に取って、お飲み！ これまでも、よく飲ませてあげただろう。お前は無愛想な時も、悪態をついていても、腹を立てていても、わしがあげた物は、いつも受け取っていたじゃないか。

たまりかねたジークフリートは、剣を振り上げて、ミーメに閃光のような一撃を加えます。ミーメはすぐさま地面にぱったりと倒れます。ファフナーの死につづく、ミーメの死です。岩壁の隙間から、弟の失態を嘲(あざ)笑うアルベリヒの笑い声が聞こえてきます。愛を捨てた男の声です。

ついに、ミーメは、非業(ひごう:道理ならそうはならない思い掛けない災難)の死を遂げます。哀れと言えば哀れです。

自分を忘れた「物狂い」

このときのミーメの狂ったような慌て振りを、世阿弥は「物狂い」といいます。

思いこんだ結果の物狂いは、たいへんむずしい。かなりの役者でも、この点を考えないで、どれもこれも同じ様に狂いを演ずるものだから、観客の共感も起らないのである。つきつめた感情からの物狂いを演ずるに当たっては、あくまで思いつめた様子をその能の中心とし、取り乱したありさまをその能の観せどころとして、心をこめて狂うならば、観客の共感も、おもしろみを感じさせる所も、かならず生まれるであろう。このような演技によって観客を泣かせる所があれば、その人はたいへんな上手というべきである。これをしっかり腹の底から理解するように努めなくてはならない。

【小西甚一編訳 世阿弥『風姿花伝』44頁】

「ハイ、分かりました」 — と、ミーメとわたしたち。

【2023/09/16 都築正道】